

「佐藤 レジューメ」

●「ユニバーサルアクセス」

※マーチン・トロー 「高学歴社会の大学」

	進学率
1. エリート型	~15%
2. マス型	15~50%
3. ユニバーサルアクセス型	50%以上

エリート型...人間形成・社会化

マス型...知識、技能の伝授

ユニバーサル型...新しい経験の提案

● ユニバーサルアクセス時代の特徴

※マーチン・トロー

「マス段階以上の高等教育においては、教授も助教授も講師ももはや学生は自ら学ぶものだと思っ
てはいけない。学生は教えられないかぎり学びえな
い」

「...教育というものは重要な技術であり、教授法
を教えることと評価することが大切になり、かつ大
学という最高学府においてすら、もはや研究の内容
は最重要事項ではなく、学生と彼らを教え導くこ
とが最も重要になる...」

「...高等教育と中等教育の距離は縮んだ...」

● ユニバーサルアクセスの本質①

※誰もが高等教育機関に進学する時代
生涯学習社会

- 一つでも、どこでも学べる
- 一つでも、どこでも学ばなければならない...

※ユニバーサルアクセス時代の本質

— 生学び続けなければならない時代

「自己教育力」の育成

「自己教育力」を学生時代にどのように付けるか

→→キャリア教育の課題・目標

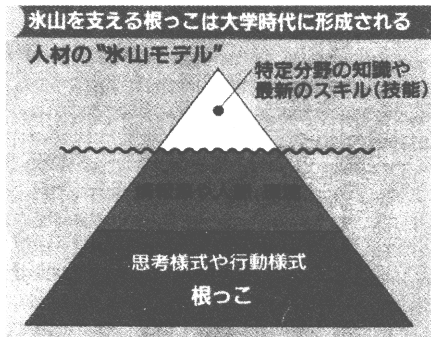
● ユニバーサルアクセス時代の本質②

※Employability (エンプロイアビリティ)

- 「雇用される能力」すなわち「労働移動を可能にする能力」
 - 従来の企業と従業員の関係を「企業・従業員相互依存型」と定義、今後「従業員自立・企業支援型」に変化させることが重要
- 日経連（現・日本経団連）教育特別委員会1999年

◇他社に移ってもそのまま通用するスキル→ポータブルスキル

● 氷山モデル



● 生涯学習とキャリア・デザイン

※ design

- 1 (絵画などの) 下図、図案を作る (建築・衣服などを) デザインする。設計する
- 2 計画する。立案する。企てる
- 3 予定する

※自分を編集する...セルフ・エディティング

「世の中が与える天職でなくて自分で編集できるものに出会って、そこから得るものを自分に合わせて編集していく」(松岡正剛) 笹川編「生涯学習社会とキャリアデザイン」

セルフマーケティング、セルフプロデュース (佐藤龍子)

● キャリアはデザインできない?!

※『ハプスタンス・アプローチ』

『ブランドハプスタンス・アプローチ』

『Luck is no accident』

「キャリアの80%は予想しない偶然の出来事によって形成される」

「予期せぬ出来事が人生やキャリアに果たす役割は大きい。ならば、積極的かつ肯定的にそうした出来事をとらえよう」

「予期せぬ出来事というも、実際は何らかの行動によってもたらされるのであり、運だけに左右される偶然の出来事ではない」

→→行動を起こすことの重要性

スタンフォード大学・克蘭ボルト教授

● 3つの問い

1. 自分はなにが得意か
2. 自分はいったいなにをやりたいのか
3. どのようなことをやっている自分なら、意味を感じ、社会に役立っていると実感できるのか

エドガー・シャイン

(2) 「生涯学習社会とキャリア」

大学教育センター 佐藤龍子

大学教育センターの佐藤です。生涯学習ということですが、私自身は大学論・高等教育論の視点から生涯学習社会の話をしていきたいと思います。教育学部の学生が多いので高等教育論が何を指すのかすでに分かっている方が多いでしょう。初等が小学校、中等が中学と高校、高等が専門学校、短大、大学以上を指しますので、広くとらえれば高等教育そのものが生涯学習の一部をなしているといっても過言ではないでしょう。

まず高学歴社会とはどういうものかを話していきたいと思います。大学進学率は、平成17年に44.2%です。短大をあわせると51.5%となっています。みなさんのお手元の資料に「ユニバーサルアクセス」と書いたものがあると思います。これは高等教育ではたいへん有名な、ほとんど誰もが必ず読んでいたマーチン・トロウという方が言っている言葉です。その方が類型を分けています。エリート型とは進学率が15%まで、マス型が15%~50%、ユニバーサル型が50%以上だと定義をしています。これに異議を唱える人はあまりいなくて、なるほどうまく分けているなというのがいまの高等教育の現状です。日本でいうとエリート型からマス型になったのはいわゆる団塊の世代です。今の54歳から58歳くらいの、昭和40年代初頭に学生生活を送った人たちです。なんとか産業大学とかいっぱい大学が出来た時代でもありました。そして学園紛争の嵐だったのですが、学園紛争はある意味では大学大衆化の一断面でもあったわけです。その時代がちょうど15%を少し超えたあたりで、日本では16%~17%でした。昭和40年代、1960年代後半の時代でした。

1986年~1992年までの7年ほどの入試の厳しかった頃、いわゆる「ゴールデンセブン」と呼ばれる時代がありました。「ゴールデンセブン」というのは大学にとって黄金の7年間で、受験生にとっては地獄でした。今と異なり、入試がとても厳しかった。浪人生が40万もいて大変な時代でした。第2次ベビーブームの人たちです。そして、その後日本は1996年くらいから急激に入試が優しくなった。つまり高等教育の研究者はこの10年間で日本の大学はユニバーサルアクセス時代になったと言っています。

18歳のうち半分が大学に進学する時代とはどういう時代か。先ほど大島律子先生が、学習者として確立する必要がある、学ぶことが陳腐化する、どんどん古くなると言われました。例えば進学率が10%だったエリートと呼ばれている時代の大学生は学んだことが陳腐化するかというとしにくいんですね。なぜかというところエリート型は「人間形成の場」であったからなんです。進学率が10%の時代、おそらく今60代後半から80代の先生たちはエリート型の大学生でした。今はすでにマス型という「知識・技能の伝授」の時代も終わって、大学はユニバーサル型という「新しい経験の提案の場」だと言われています。大島先生が言われていたように大学の授業の形態そのものも変わらざるをえない。かつてのように一方通行で知識を伝授するような授業だけでは大学は駄目であるとマーチン・トロウは

いみじくもかなり前から言っていたのです。マーチン・トロは「マス段階以上の高等教育においては、教授も助教授も講師ももはや学生は自ら学ぶものだと思ってはいけません。学生は教えられないかぎり学びえない」と言っています。「教育というものは重要な技術であり、教授法を教えることと評価することが大切になり、かつ大学という最高学府においてすら、もはや研究の内容は最重要事項ではなく、学生と彼らを教え導くことが最も重要になる。高等教育と中等教育の距離は縮んだ。」ご批判もあるとは思いますが、高等教育の著名な研究者がこう言っています。

そしてユニバーサルアクセス時代の若者というのは、一方でニートやフリーターも多い。私は高等教育が専門なのですが、キャリアデザインの授業もやっていて、こちらのほうにも軸足がかりはじめています。みなさんご存知かもしれませんが、平成15年のデータで大卒の無業者は23.5%に達しています。ほぼ25%近くの学生が大学を出ても無業です。就職率を間違えないで欲しいのですが、就職率とは就職希望者が分母になりますので、正確な反映をしていない可能性があります。これは学校基本調査の数ですから正確な数字です。しかし2007年問題で団塊の世代が退職することと景気が少し回復してきたので、今年は良くなるでしょう。

フリーターとはアルバイトとフリーをかけあわせた造語で、リクルートが作りましたが、今400万人以上いるそうです。ニート(NEET: Not in Education, Employment or Training)とは、教育も受けていない、雇用もされていない、トレーニングもしていないという意味で、イギリスで言い始めた言葉です。それを小杉礼子さんが日本に広めたものですが、85万人以上と言われています。大学進学率が51.5%、初めて50%を超えました。

さて、フリーター、ニートの増加や若者を取り巻く環境について、お話ししましょう。雇用環境が厳しい、若年雇用が厳しいというのは会社に余裕がないということで、私も民間企業に十数年おりましたので、確かに経営環境が厳しくなると即戦力として中途採用をどんどん増やし、新卒をセーブしていました。ここ3~4年くらいは少し良くなっているのですが、若い人を採らない、新卒は採らない時期がありました。また、3代前4代前までは自営業や農業、漁業が多かったと思うのですが、自分の親やおじいさんを見ていただくとサラリーマンが非常に多い。つまりかつては家が商売、家が農業、家がお茶畑となると親の働いている姿を見ていたのですがなかなか見られなくなった。

あるいは選択肢が非常に多い。日本に職業は2万~3万あると言われています。これは年代と共に増えていて1950年代にこんなに何万という職業はありませんでした。職業が多くなると選択肢が多くなる。選択肢が多いと楽かという楽でもない。選択肢が多いと選択できない、決められない、先送りする、どんどん「高等遊民」になるということが、すでに成熟した諸外国において多くなっています。

また、安易に衣食住が足ります。私が学生の頃もコンビニはありましたけれど、あんなにいっぱい24時間営業しているところはありません。ですから自分で作ったりしなければならぬし苦勞をするわけですが、いまは衣食住が足りる。それから変化が激しい。先ほ

ども言ったように学ぶことがすぐに陳腐化する。日本は高度経済成長やバブルを経て、先行きがどうなるかの不安もあるでしょう。

コミュニケーション不足とか学習指導要領の変化もよく言われることですが、少子化や地域の崩壊などいろんなことがこの背景にあると思います。活字はインターネットからという影響もあるかもしれません。3年生はなかなか言わないのですが、1年生は正直で、読書は朝の読書運動でしか読んでいない、文庫本は年に1冊も読まない、新書本は言われたので読んだと言います。非常に読書時間が少ない。

「初年次・導入教育」という高等教育の専門用語なのですが、わかりやすく言えば高校から大学への接続や「移行（トラディション）」がうまくいっていないのではないかと。かつては大学生になるということは大人への通過儀礼で、入試も非常に難しかった。大学生も少ないということでそんなに意識しなくても移行が出来ていた、接続がうまくいっていたわけですが、どうもそうではない。そしてもう一つ、大学から社会への接続や移行はどうかということがいま言われています。

さて、ユニバーサルアクセス時代の本質、18歳の半分以上が大学に行く時代とは、どのような時代なのでしょう。これだけ大学が多様になり、大衆化した大学生やそこに生きる人たちの本質はなんなのかと考えています。誰もが高等教育に進学する時代、ユニバーサルアクセスのアクセスとはいつでも、どこでも高等教育にアクセスしていいという意味も含まれています。ユニバーサルアクセスというのは進学率が50%になった事実だけをいうのではなく、どこでもいつでも高等教育機関に誰もが接続する、そういう生涯学習の時代だと言われています。

いつでもどこでも学べるということは裏を返すとある種の脅迫なんですね。いつでもどこでも学ばなければならない…。ある意味では非常に嫌な時代でもあるわけです。現在65歳以上の方たちはエリートの時代の大学生でしたから、大学を出たというだけでものすごい価値があった。10人に1人しか大学に行っていない時代というのは古き良き時代だったのかもしれませんが。ところが18歳の半分以上が行く、こんなに高等教育が大衆化してどこにもある、e-ラーニングもある、通信制もある、駅前にもある、出前もある、科目等履修生もある、編入学もある、大学院も山ほどある。こういう時代というのは、大島先生も言ったように一生学び続けなければならない時代です。私の言葉でいうと「自己教育力の育成」です。大学で学んだことなどほんの何万分の1でしかありません。「自己教育力」とは、どこかで必要だったら必ず学ぶぞという力だと思います。「自己教育力」を学生時代に身に付けなければいけません。ですからいま私がやり始めているキャリア教育というのはなにも職業観や仕事観だけではありません。いつ、どこで、どんな風に自分が学んでいったらいいのかということや学生時代に身に付けること、それが生涯学習社会を生きるカギではないかと思っています。

いま流行りの言葉をひとつだけここで入れてみましょう。それは **Employability** (エンプロイアビリティ) という言葉で、どちらかというと経営者サイドからよく言われる言葉です。

雇用の流動化を促進するためによく出る言葉で、「雇用される能力」「労働移動を可能にする能力」ということで、従来の企業と従業員の関係が「企業・従業員相互依存型」だったけれども、これからはお互い自立しようということを1999年に日本経団連が報告書で言いました。今後、「従業員自立・企業支援型」に変化させることが重要と述べています。少し勝手な話でして、今まで何でもかんでも企業はやってあげようとか言っていたのに、経営が厳しくなったから急に自立してくださいというような言い方ですね。雇用や労働の中にはこのような流れがあるということです。また他社に移ってもそのまま通用するスキル、ポータブルスキルという言葉もよく使われます。

諸外国においてはすでにユニバーサルアクセス時代で、韓国では大学進学率が80%を超えていますし、アメリカも非常に高いわけですが、そうすると北欧などでは仕事と学びが相互に乗り入れを始めています。学んで大学に行って、働いてまた学んでというような、ジグザグな移行期を経ているそうです。学びながら仕事をしてその中で試行錯誤しながら経験を積んでいく。生涯学習的に職場から離れて何らかの知識を吸収することが必要なのですね。

私自身も社会人として修士と博士課程に行きました。コンサルタントをしていて行き詰まりを感じて、もっと基礎を学ぼうと思い大学院にいきました。これからはおそらくストレートに大学院に行くだけではなくて、仕事をやってある程度キャリアを身に付けて、それから大学院に行ってそこで学ぶ人も多くなるのではないのでしょうか。

次は「氷山モデル」です。出典は、週間ダイヤモンドです。(高橋俊介(当時ワトソンワイアット社長) + 編集部: 二一世紀の企業社会を動かす「超成長大学」の人材育成の鍵、週刊ダイヤモンド、95.10.28号、pp.74-78)。他にもいろいろ使われるモデルでもあります。思考様式や行動様式である「根っこ」、その上にスキルがあるんだということになると、「根っこ」である行動様式がうまくできていないと上のスキルは不安定になってしまいます。情報処理検定何級が必要だというとすぐにそれに飛びつくとか、何でも資格をとるとするのは上の部分です。下の根っこの部分ができていないとだめではないかということですね。根っこの部分はわりと日常生活に密着した部分です。多様な他者を受入れるとか、自分を開く、変化を怖がらない、ストレス耐性など言ってしまうと自己教育力そのものではないのでしょうか。自学自習、自分で考える、自分の考えをまとめるのかも含まれていますね。こういう「根っこ」がないと上にいくら乗せてもうまくいかないということです。

さてまとめになります。「生涯学習社会と私たち」ということですが、キャリアの話をししたいと思います。キャリアはラテン語でもともとは馬車、その後馬車道、競馬のコースが語源です。辞書で見ていただくといくつか意味があります。いろいろな定義がありますが、職業や仕事そのものではなくて、「一生を通じた職業経歴を含めた生き方の追求」というのがキャリアと言われています。この中には教育学部で教職を受けている方が多いと思いますが、初等・中等ではキャリア教育をほぼすべての教師がせざるをえなくなるでしょう。そのときに細かい、小さい、狭まった職業教育にはならないようにしてください。

生き方の追求とは、教育者としての教師側の生き方や教師側の見識や教師側がキャリアをどう考えているかがすべて反映する授業だと思っていただいていた方がいいでしょう。

「キャリアデザイン」というのは、天職だと思われるものに出逢うのではなく、自分で編集できるようなものだと私は考えています。いろんな考えがキャリアデザインについてはあります。最も新しい理論と言われているのが「ハプンスタンス・アプローチ」「プランド・ハプンスタンス・アプローチ」というものです。スタンフォード大学のクランボルツ教授の考え方です。おそらく初等・中等でキャリア教育を担当すると、きっとこの理論とは逆の話を文科省からされるのではないのでしょうか。社会人のキャリアを考える場合には非常に参考になる理論です。「キャリアの80%は予期しないものから起こる」。だからキャリアはデザインできない。デザインできないからこそ、行動を起こすことがまずは重要だ。デザインは大まかな計画、大まかな方向性でいい、あとは行動を試みようということです。ただし、キャリアの80%が予期せぬことから起こるといって、無計画に漂ってばかりいては、キャリアは形成できません。

「セレンディピティ」というのは時間の関係上少しだけにします。セレンディピティもちょっと流行りの言葉です。偶然の出来事はコントロールできない。しかし、偶然の出会いを生かすことはできる。行動したり、受け入れる準備がないと偶然に出会う確率は高まらない。セレンディピティは、鍛えることの出来る能力だと茂木健一郎さんは言っています。セレンディピティはここではネットワークだと思っていただいていた方がいいでしょう。学習をする、ネットワーク、人とのつながりを持つことがセレンディピティの重要な要素です。まず、行動を起こす。待っているだけでは幸運は訪れない、ということ。

生涯学習社会は裏を返せばある種の脅迫社会でもあると私は先ほどお話ししました。余暇や趣味を生きるということだけではなくて、自分自身が生涯学習社会をどうとらえていくのか、自分はどうしていくのかということを経えず問われている時代ではないのでしょうか。

最後に、エドガー・シャインの「3つの問い」をお話しをしましょう。「3つの問い」は、「自分はなにが得意か」、「自分はいったいなにをやりたいのか」、「どのようなことをやっている自分なら意味を感じ社会に役立っていると実感できるのか」です。生涯学習社会を生きていく、働いて、生活して、日々過ごしていく、そして何かの節目の時に、この3つの言葉を考えてはどうでしょうか。3つの問いに、簡単に答えは出せません。だからこそ、生涯学習社会の中で、私たちはどのように生きていくのか、3つの言葉を考えながら、今日の話の締めくくりたいと思います。

阿部：

佐藤先生ありがとうございました。キャリア関係の話ということで全員に関係が深い話ではないかとも思いましたが、実際に話を聞きますと学生であるか社会人であるかは関係なく、学びながら生きるということで全員に関係ある話をいただきました。

それでは最後に話題提供3「近代新聞テキスト化事業とは」というテーマで、この近代

新聞テキスト化のプロジェクトを進めておりますエイジングブライト倶楽部の剣持さんに話をさせていただきます。よろしくお願いします。